

『白樺』群像（一）

武者小路実篤

武 田 寅 雄

トルストイアンということ

作家としての武者小路実篤が因って立つ人間的基盤は何であるかと言えばそこにトルストイの思想が大きく横たわっている事は否定出来ないであろう。彼自身の談話によると彼にトルストイを知る機縁を与えたのは叔父勘解由小路資承であるという。武者がその思想を作品化する前に先ず実践する一つの生き方もこの叔父に負う処が多いようである。処が、武者小路より前にトルストイに心酔し、然かも彼とは異った方法でトルストイズムを実践した者がある。芦花徳富健次郎がそれである。

芦花がトルストイを読み始めたのは兄蘇峰の嚮導によるもので明治二十三年九月から十月にかけて『国民之友』に「露国文学の泰斗トルストイ」を連載したのを手始めに二十四年には四月から五月に「トルストイ伯の飲酒喫煙論」を執筆している。次いで英訳による「アンナ・カレニナ」に親しんで一層トルストイへの傾倒は深まって行つた。さらに明治三十年には民友社の企画による十二文豪伝の第十巻として『トルストイ』を刊行した。その後も「トルストイ伝補遺」（「国民之友」明三〇・一一）「トルストイ家の家庭教育」（「国民之友」明三〇・一一〜一二）と書き進むに従

つてトルストイへの理解と傾倒は深まっていた。

これより嚮、兄蘇峰は欧米視察の途にわざわざトルストイをヤスナヤ・ポリヤナに訪ねて歓談した。（明二九）芦花は「不如婦」以後文名ようやくあがるに従い生活も安定したので外遊を思い立ち、明治卅九年四月先ず聖地パレスチナを訪れ次で兄に倣つてヤスナヤ・ポリヤナにトルストイを訪ねた。事は『順礼紀行』中の「ヤスナヤ・ポリヤナの五日」に詳しい。この五日間トルストイ家の客となつたことは彼に多くの刺激を与え、人生に就いて、作家のあり方に就いて考える機会を与えた。トルストイと毎日議論し、多くの共感をもち、多少の主として国家とか政治については意見を異にした。しかしこの五日間に彼の後半世を大きく変化させた原動力を与えられたのである。彼は八月には帰国したが翌四十年一月、東京府北多摩郡千歳村粕谷の農家を買入れて永住の決心をした。この粕谷転居には二つの意味があり、兄蘇峰からの完全な独立と、トルストイに学んだ農業中心の作家生活である。もつともトルストイの農業生活は地主としてのそれであり、その思想の体現としての農業生活ではない。

芦花の眼に映つたトルストイの生活は一つの理想生活であつたが、トルストイはその頃すでに宗教上思想上の悩みから反政府、反教会的言説を吐き、家庭にあつてはその思想を実践するために財産である農地を小作人に無償で解放し、著作権をも放棄しようとして夫人を始め家族の激しい反対に会つて^{註一}いる。芦花が訪ねた一九〇六年から四年後の一九一〇年には遂に家出を決行し病を得て十一月二十日アスターポヴォという寒村で行倒れとなり、駅長舎宅に収容されて八十二年の生涯を閉じている。行きずりの芦花には老トルストイの内心の苦悩は解る筈もなかつた。彼は解放的で大家族を擁し、気儘に暮しているトルストイの生活を、大地主の家長でありながら、少しの虚飾もなく、自ら農耕を楽しみ、庭先のテールブルで大家族の全員がともに食事をするようなおうらかな生活に驚歎したのである。芦花は自ら省みて忸怩たるものがあつた。兄の保護の下に作家としても昨今ようやく一人前になつたばかりである自分の生活をこゝらで改革しなければならぬ、新しい生活の基礎を築かねばならぬという考えが激しく彼の行動を促したのである。トルストイの

ロシア式の大規模な農業生活にはおよびもないが、東洋的な晴耕雨読の生活もまた可しという考えで、当時は新宿から人力車で二時間も要した草深い粕谷に引籠ることに決意したものである。この新生活は古い農家を買入れて修理した新居で始められ、鋤を手にしたことのない彼は近所の百姓に教えられつつ農作業を習得、一方では一作が出来る毎に建て増して可成り豊かな田園生活であつた。

武者小路がこの芦花の新居を訪ねたのはやはりトルストイに傾倒した二十才の時で、レクラム版の『ルツェルン』^{注三}を読んで感動した彼が、同じトルストイの影響から出発した芦花の生活を見なかった、またその風貌に接しなかったからであると思われる。彼はその時の印象を後に『自分の歩いた道』の中で「僕は芦花生が先生顔されずに小さい友人として、同等の態度でいろいろ話して下さったことに感動し、また一方得意に思い、たいへんいい感じを受けて帰つて来た」と述べている。(もつとも後に彼の処女作を芦花が酷評したことで腹を立てて絶交している)しかし粕谷で田園生活を楽しんでゐる芦花と武者とはトルストイ受容に根本的な相違があるのである。

それでは武者小路のトルストイ思想の受容はどうであつたかというに、そのトルストイとの根本的な相違の出発点はキリスト教思想に根元を発しているか否かにある。すなわちトルストイの思想の根柢にはギリシア正教を奉ずる帝政ロシアのキリスト教に対する疑問、宗教が時の権力と妥協していることに對する不満、聖書の正しい解釈等々それは現代生活の批判とともに自己に對する峻厳なる反省となつて現れてゐる。靈肉の二元的相克に對する矛盾に苦しんだトルストイの当然行きつく途であつた訳で、それが遂にきびしい禁欲主義となり、己を律すること極めて厳で、遂には芸術否定に傾いて行つたのである。武者も芦花と同様トルストイのこのような経過と帰結を総て理解した訳ではない。彼はトルストイの真面目な人生態度、何よりも善なりと信じたことを直ちに実行に移す実践力に強い感動を覚えた。しかし、そのような思想に到達した根本にキリスト教思想があること——殊にそれが一つの思想というよりも信仰に根ざしていることは理解の外にあつた。これは志賀直哉の内村鑑三における場合も同様である。直哉は内村鑑三の聖書研究グルー

プに属して七年間も鑑三の教えを受けながら遂に信仰に入り得ず、自然に離反して行つた。しかも彼の一生を通じて鑑三の影響は極めて顕著である。つまり直哉は内村のキリスト教信仰を抜きにして、その形成された人格、人間的魅力に感動して七年間もその講筵から離れなかつたのである。武者もまたトルストイの二元的相克の根元は理解せず、ことにトルストイの自己を律する極めて嚴格である点に同調することは出来なかつた。

この頃彼の書いたものに「クリンゲルの「貧窮」を見て」（明四一）という一文がある。これは労働というものが、ミレーの描いたものと、クリンゲルの描いたものでどう違うか、すなわちミレーの絵を通して労働は崇高なものとして描かれているが、クリンゲルのものは生きるためにやむなく労働する者で、トルストイのいわゆる現代の奴隸なる労働者を描いているという。そして彼はいう「吾人はこの絵をみて労働者の崇高なる天職を感じることは出来ない。しかし吾人はこの絵をみて現今の労働問題の起る原因を知ることが出来る」と。続いて彼は面白い見方を述べている。すなわちミレーやミュニエーは自ら貧しい農夫であり礦夫の生活を日常観察していたのに、その絵は貧窮の実態を描かず、富裕な商人の息子であるクリンゲル——貧しさの経験のないクリンゲルが却つて餓えの実態をとらえて描いているのは皮肉である。結論として、自らの理想のために苦しむ（労働する）ことには価値があるが、生きるためにのみ義務づけられた労働には理想もなく価値もない。ミレーの描くような労働は理想であり、クリンゲルの描く労働者は現実の労働者と思うと結んでいる。ここに武者小路の理論があり、理論の矛盾がある。すなわち理想の労働をなし得ない現代社会の矛盾には触れずにそれが理想と現実の相違で、自分は理想を取るというのである。彼の思想はしばしば絵画に導かれるが（後述ロダンにおけるその最たるものである）明治三十年代の終り頃にはドイツ語訳により、トルストイ、ツルゲーニエフ等のロシア文学のほかイプセン、ゾーデルマン等にも親しんだが、後にメーテルリンクを読んでトルストイの禁欲的人生觀に対し人間性恢復の文学としてこれを歓迎している。つまりトルストイは尊敬しても追隨して行くことは出来なかつた。それは困難な途であるからとか理想に走り過ぎて実現不可能であるからという理由ではなく、根本的な

思想、生活感情の相違に由来している。

彼の初期文学活動はこのトルストイからの脱出期に始まっている。彼が小説を書くことも人生観を深め、人間を知る一つの手段となされたので、それは彼のほかの実践行動と緊密に結びついている。

注

(一) 一八八四年の『我等何を為すべきか』以来、禁酒禁煙菜食（健康上の配慮に非ず）等の禁欲生活を実行。一九〇一年には極端な宗教上の言論により神聖宗務院より破門された。一九〇七年の革命鎮圧後政府が多くの革命家を処刑したことに對してその翌年『余は黙する能はず』を書いて要注意人物となった。またドウホポール教徒の為に『復活』（一八九九）の印税を投げ出してアメリカへの移民を援助している。

(二) 『ルツェルン』（一八五七）五七年の西欧視察によつてトルストイは西欧に於ては既に農奴制もなく貴族の莊園制度による身分保証もないことを眼のあたりに視た。資本主義社会の必然性を認めざるを得なかった。彼は失望して帰国したが、私財を投じて小学校を建て教科書を編纂した。

「新しき村」の構想

大正七年七月に「新しき村」という月刊誌を発行、八月に『新しき村の生活』（論集）を新潮社より出版し、先ず「新しき村」のイメージ・アップを行い、十一月十四日宮崎県児湯郡木城村字城に「村」の建設を始めた。明治四十三年四月雑誌『白樺』が創刊されてより「村」の発売まで約八年その間作品活動を通してやはり一貫した理想実現へ実践行動の跡を跡づけることが出来るのである。彼は常に新しい生活の活力を外來の思想に求めつつ、しかも最も日本的な展開を試みているのである。『白樺』の六号雑誌で彼はいう「もしこの世の中に。エマーソンとか、ホイットマンとかトルストイとか、イプセンとか、ニイチェとか、メーテルリンクとか、ロダンとか、クリンゲルとか、Van Goghとか、

云ふ人達が居なかつたらどんなに自分は淋しいだらう。かう云ふ人達が自己の全人格をもつて怒鳴つてゐてくれるのだから生きてゐるのが氣丈夫なのだ。有り難い有り難い。」彼にとつてエマーソンからヴァン・ゴッホまでの文人、哲人画家は、その時々彼の生活の指針であつて、すなわち実践への直接の導きをそこに見出すのである。彼くらいこれらの人々から深い感動、影響を受けた者はいないのである。しかし一方から考えるとそれらの影響にはある限界があつて彼自身は根本的には少しも動揺してはいないといえるのである。つまり自己の全生存をかけてそれらの思想と取組むのではなく、自己に都合のいい部分だけ取入れるというやり方である。彼が全身全霊を打込んだと思われるトルストイにしてすでに然りで、トルストイ思想の都合の悪い処は切捨ててゐるのである。それではその不変の自己はいかにして築かれたか、その本体は何か、それが武者の行動の源泉であるからそれを明かにしなければならぬであらう。とに角彼の自我の強さはそれらの彼の行動や思想の根柢にある何ものかであることを示している。彼はいう「彼は学習院に居た時に自分よりも偉い人間を知らなかつた。ある人は彼にそのことを確信をもつてつけた、彼は口ではただ笑つてゐた、だが腹の底では、勿論といつた。それでも社会へ出るまでは世間には自分より偉い自分より恐ろしい人間がゐるだらうと思つた。さうして世間に出た、彼は世間を知るに従つて日本には自分より偉い人間はゐない。」と知つた。(大正三年『白樺』十月号)

ここでは「偉い」という言葉で表現しているが、彼の感想文をはじめいろいろな作品によく出てくる言葉である。これは単に傑出した人物という意味ではない。自己を常に中心に置いて、自己より何等かの意味で傑出してゐること、すなわち自己に何等かの影響を与え得る人物ということである。しかもそれは「日本には」というただし書がついてゐる。日本にはいないが、外国にはいる。トルストイもその一人である。彼がトルストイに同調出来ない一つとして性欲の問題がある。トルストイは極端な自己否定の一部として肉欲の恐るべきことを教え、それを克服しなければならぬといつてゐる。しかし青年期の彼が直ちにこれに同調出来る訳もなかつた。「肉欲の馬鹿げてゐることと、誠の力の強い

ことは、この頃一層感じる。しかも肉欲の奴となること、日に幾回なることを知らず。パイブルを読んでゐるうち、ト翁の著を読んでゐるうちに、時々変な考へが起る。罪深き者よ。」(明三九・六・一四日記)といっているが、この間の事情は四十三年に書かれた『お目出度き人』に明らかである。一般に処女作と見られているこの作品は、彼の失恋を主題にして書かれたものであるが、この一見幼稚な作で実にしばしば出て来る言葉は「自分は女に餓えてゐる」という言葉である。はなはだしい処では一頁に三回もこの言葉が出てくる。実に露骨な言葉であるが、しかもこの作はまた実に清純な恋愛小説でもあるのである。つまり性欲は青年期に起ってくる生理的現象で、それはどうすることも出来ないものと観念している。恋愛はこの生理の上に立つてはいるが、一応精神的な別の次元のものと考えられている。あけすけに性欲に悩まされることを繰返し述べているが、それが衝動的な行爲としては現れない。積極的に少女に近づこうとも試みないし、ただ心の中で少女を偶像化理想化するに止まる。すこぶる歯がゆい作品といわねばならぬ。この作はその頃流行していた自然主義作品ではないから、体験をそのまま直叙したものではない。もつとも体験そのものがブラトニックで、ゲーテのヴェルテルの恋愛である。しかも相手とは直接話しせず、その心中も確かめず、全くの一人相撲である。お目出度き人という所以である。考え方は飛躍しているが、行動は健全で常識的である。

先ず自分の両親を長い間かかって説き伏せ仲人を立てて申し込む。未だ齡が若いし女学生だからと断られると、何年でも待つからと再び申し込む。健全そのものである。その間に結婚観や女性観、理想の妻とは何かというようなことが、心の中で反芻される。最後に少女が結婚した話を聞かされる。失望するがしばらくすると少女は実は自分を恋していたのだが、父や母の勧めで止むなく今の結婚をした。たとえ彼女の口から「妾は一度も貴君のことを思つたことはありません」といっても自分はそれは口だけで本心は自分に恋していたのだと思う——と結んでいるが、これだけ失敗しても自信を失わない処は実に実に見事である。この作は『白樺』創刊に先だつて書かれたが、実はトルストイからの脱出を記念する——あるいはその氣持を自ら確かめる意味で書かれたものではないかと思われる。(これについては本多

秋五が『白樺』派の文学」の中で「トルストイ卒業の問題」として論じている。何故かという第一性欲を止むを得ぬものとして肯定する。第二自己の倫理的人生觀の確立が考えられる。ここでは恋愛を通して自分が高められ失恋によつても人間が少しも害なわれないでかえつて向上し自信を得ているということである。彼はこの作に対して自然主義者たちから嘲笑的批評がなされたのに答えて「僕は日本の自然主義が自己の生長に無頓着なのに反対して立つ」といつている。充分意識して理想的な失恋を描いた訳である。なおこの作は文章的にも特徴があつて、平易な文体で卒直に叙べ、文章上裝飾的な部分が殆んどなく、しかも充分に自己の述べんとする要を竭している。ただし極めて主觀的で自然描写、人物描写は殆んどなく、当の恋人さえその容貌の特徴など具体的には何も描かれていない。この後に書かれる多くの作品にもそれは当てはまるので、己の欲することだけ書く——手法も、文章も表現上の配慮は客觀的には何も払われていないということが出来る。彼のこのような態度を単に独善的恣意的といい切ることは出来ない。自己中心、自己の充実が彼の場合は倫理的要請に基づくもので、一方でトルストイの人道的行為の尊重すべきことは認めつつも「人は五十までは自分のためにつくさなければいけないと思つた。自分を大きな人間にしなければ何事も出来ない。五十までは自分を大きくするために全力をつくさなければいけないと思つた。」（明四一・一一・五日記）といつて自己充足を至上命令と考えている。これは多分にメーテルリンクの『自己愛』^{注一}の精神に影響されたものである。自己充足をはかることは單なる恣意的行為でなく一つの理想への途であるというのである。性欲についてはずっと後にも『人生論』（昭一三）の中で「性欲を罪惡視するのはまちがひである。しかし同時に性欲を放縱にすることは結果として罪惡に落ちやすい。」といひ「性欲は罪惡ではなく、人生にとつて最も大きな役目を果してゐる大事な本能の一つである。」といつてゐる。

明治四十三年の時点で藤村の「家」、節の「土」、潤一郎の「刺青」、秋声の「足跡」とモニュメンタルな作品が多く現れているが、それらの既成新進の作家とは全く異質の文学として「お目出度き人」が登場したのは注目すべきこと

であつた。戸惑つた批評家（長江）の嘲笑的批評にも拘らず、武者小路実篤の存在はこの一作によって、善くも悪くも強く文壇に印象づけられたのである。武者小路の「お目度き人」に示された自己愛が単に個人の倫理的追求に止まらず社会的関心に発展した処が、芦花と異なるところを前に述べたが、大正二年五月に書いた「切りはなされた個人」という短い感想文によると「すべてのものから切りはなされた個人を考へると、個人といふものは無価値なものになる。

無意味なものになる。さうして死がすべての終りになる。昔の個人は君主といふものに自己をむすびつけることによつて自己の有意味を感じることが出来た。自分達より少し前の個人は國家に自己をむすびつけることによつて自己の有意味を感じることが出来た。しかし自分達より若い人（精神的に）は自己を人類や自然に結びつけることによつてのみ己の有意味を感じることが出来る。我々のつとめは如何にすれば自己を人類や自然と結びつけることが出来るかを知ることにある。それには自己を人類や自然の意志のままに何処までも生かすより仕方がない。」といひさらに続けて「自分は今呑気に生きてゐる。しかしいつまでも今の儘ではゐられない氣がしてゐる。自分の為や自分の生長力や、自分の欲求や、自分の淋しさは自分に徹底した生活を強めてゐる。しかし生ぬるい室になれてゐる自分はさう云ふ生活の前に恐怖を感じてゐる。いつになつたら自分は本当に強い人間になれるだらうか。」といつてゐる。ここに飛躍せんとする武者小路の意志、社會に対して自己充足の結果を問わんとする考えがみられるのである。就て大正七年に結実する「新しき村」への志向は早くもこの頃から窺えるのである。武者小路の思想が一見、個人主義、独善主義のようにみえながら多くの共鳴者、同調者、崇拜者を持つ所以がここに在り、それを基盤として「新しき村」運動は展開するのである。

彼は明治末年から大正中中期にかけて戯曲を精力的に書いてゐる。もつとも彼の戯曲は自己表白の一手段に過ぎないで、場所、人物設定、歴史的考証等上演のために必要な配慮は一切払われていない全くのレーゼ・ドラマである（ただし大正四年三月に発表した「その妹」は例外で、ある程度上演のための配慮が払われている）。そうして大正七年に「新しき村」構想を五月から六月にかけて「新しき生活に入る道」、六月「新しき村につきて」、七月より月刊『新しき村』

刊行、八月新潮社より『新しき村の生活』出版等の活動が見られる訳であるが、そこに到達するまでに彼の内部にどのような必然性があつてこの実践に踏み切つたのか。時代は大きく変化しつゝあつた。

大正三年六月所謂サラエボ事件を発端として第一次世界大戦が始り欧州の天地、世界の海洋は血生臭い戦乱の巷と化してしまつた。日本も日英同盟の誼みにより八月には対独塊宣戦布告を行い、山東半島の膠州灣を封鎖した。青島要塞が陥落したのは十一月である。その後戦争の進展半ばに大正六年（一九一七）十一月ロシアに革命が起り、大正七年十一月によりやく休戦条約が成立しドイツ帝国の崩壊により大戦は幕を閉じたが、その間大正七年八月には所謂米騒動が国内各地に起つてゐる。このような社会情勢の激動も武者小路の実践に何等かの刺激になつたことは当然考えられることである。もつとも彼はトルストイアンであつたからかつて日露戦争の当時、日本海大戦のあつた明治三十八年五月二十七日の四日後、三十一日の日記に実業家が戦争で富をなし庶民が戦争の犠牲になることに對し義憤を感じてゐることを述べてゐるが、今回はさらに大規模な戦争が起つたので「彼が三十の時」（大正・一一）では戦争に對し個人の力の無力であることを歎いてゐる。この作では「お目出度き人」のような極端な明るさはなく、身辺多事で、芸術家としての才能の問題や、自然主義文学者、中でも正宗白鳥に對する反発やらで悩むことが多かつた。「お目出度き人」の系列に屬するものは四十五年に書かれた「世間知らず」でその後は戯曲形式で自己の中にある靈的なもの偉大なものを探求しようとしてゐる。戯曲「或る日の一休」（大正・四）、「わしも知らない」（大正・一一）、「二十八才の耶穌」（大正・二）等一連の劇は一休の中に、釈迦の中に、キリストの中に自己を発見しようと試みたものである。それに續いて「彼が三十の時」では直接自己を語るのである。例えば「わしも知らない」を挙げてみる。これは戯曲ではあるが舞台の制約は考えられてゐない。流離王が報復のために釈迦族の男女を捕えて虐殺するのを釈迦はただ悲しそうに拘々留園でご覧になつてゐる。弟子達がいらいらして師に尋ねるが釈迦はそのまゝ動こうともしない。多くの残酷な殺戮が行われる。しかし運命はやがて流離王をも火焰の中にほうむつてしまふことを釈迦は知つてゐる。こういう人の世の争いを

目のあたりに見て釈迦は弟子達に諭すのである。「わしの教へを覚らぬものにとつてはこの世に生きることは迷の内に生きることだ。さうして平和な夢をみる者は稀だ……すべてはめぐる……死ぬ、生れる、生れる、死ぬ……だがわしはわが教へに従つてすべての人が調和して生きてゆくことを望んでゐる。さうしてさういふ時の来るのを夢想してゐる」という。弟子の目蓮が「さう云ふ時が参りませうか。」ときくと釈迦は「来る」という。「いつさういふ時が参りませう。」と問い返されて釈迦は「それはわしも知らない。」と答え沈黙の裏にこの劇は終る。いささか禅問答めく結末である。彼の個人主義は個人の完成がそのまま人類の完成に通ずるという立場を常にとつてゐる。殺傷し合い、憎み合う人間が、やがて次第に調和のある平和な人間に完成されて行くことに希望をもっている。このような観念は一方に戦争を憎みつつも社会主義者のように合理的理性的にそれに対処しようというのではなく、善意によつて、人々の連帯感によつてやがて平和を将来しようという、甘いといへば甘い、お目出度いといへば正にお目出度い考えに到達するのである。同様にして若きキリストに自己を見出し、人生への希望、人類の愛による結合を夢想したのである。別の形で反戦思想をはっきり打出したものは戯曲「その妹」（大正四・三）である。ここでは人物設定からして反戦的である。戦盲になつた画家の兄が再び絵筆を握れなくなつた悩み、それをペンにかえて作家になろうとするもがき、その兄の手になり足になつて兄を再起させるために自らを犠牲にしようとする妹。そして最後の幕切れの処で主人公という言葉は「俺は力が欲しい」である。

戦争はわれわれに多くの問題を提起してみせる。日本で社会主義思想が空想的なそれから実践的なものになつたのは大正中期であるが、戦争による経済界の発展——日本は米国とともに欧州諸国の戦争経済の兵站部であり、軍需産業を中心として重工業部門が急速に伸びて、労働者の自覚を促し、ロシア革命の余波を受けて社会運動が活発になつた。また好景気による物価騰貴は遂に大正七年夏、自然発生的な暴動となつて現れている。これら一連の現象は文壇人にも対社会的関心を深めることになり、『種蒔く人』の運動が起り、有島武郎の「農地解放」となつて現れるのであるが、武

者小路にあつてはそれを一つの社会認識にまで昂めることは出来なかった。日本全体が米騒動にわきたつてゐる時に全く時を同じくして「新しき村」の運動が開始されたのは驚くべき皮肉である。有島は米國留学からの帰途英國で折から亡命中のクロポトキンに会つて帰国したが、彼はその理想を実現するため大正十一年には「宣言一つ」（『改造』一月号）を書き、父より遺産相続した北海道の狩太農場を無償で小作人に分配した。これはその行動の是非は別にして、社会認識において武者とは根柢から異つてゐるといねばならない。武者小路の思想の根柢には社会正義はない。社会主義的な思想の裏付けもない。従つて米騒動の意義とか、その社会的意義の客観的把握は困難であつた。かつて「自分達より若い人は自己を人類や自然に結びつけることによつてのみ自己の興味を感じることが出来る。（大二・五）切りはなされた個人」といつた武者の進歩性は、社会的に少しも働きかけをせず、自己を中心として、自己発展のための実践面においてのみ社会性をもち、連帯性をもつのである。大正七年までの多くの戯曲に示された自己発現が一つの限界に達した時に実践への強い志向が見られるのは蓋し当然の帰結といふべきである。彼の創作活動は常に社会に對する呼びかけであり、自己の真髓を社会に発現することである。一見して成功の見込みのない仕事に猪突的に這入りこんで行くいわばドン・キホーテと世間は見るのである。しかし彼にはそれらはある意味で計算済みであり、ただ世間一般、批評家をも含めて社会全体とその考えの基礎が違ふのである。

「人間に愛憎をつかつて成功するより、人間を愛して失敗する方が、勝利者だ。失敗しても人間を益々愛することが出来れば、それは失敗ではない。」

「主義が人間を生かすよりも、人間が主義を生かす。同じ主義でも本当の人間が、一生たたきこんだのと、嘘の人間が、声色をつかつてゐるのは同一でないことはわかり切つてゐる。」

「会員（「新しき村」の）になる人の資格は、至つて簡單だ。熱心にこの仕事の成就を信じなしとげる為に本気で働きたいという氣のある人なら誰でも歡迎する。」

これらの言葉をみると例えば、熱心に仕事をするのではなく、仕事の成功を信ずることが資格の第一とするあたり武者の面目が躍如としている。成功、世間的な意味での成功を予測出来てこそ仕事への情熱も湧き出るのであるが、武者小路の場合、成功するか否かは問題ではなく、種を蒔けばやがてそれは新しい芽として世に出るであろうという考えである。報告によると第二次（大正八）には日向の「新しき村」の村民は三十二人、荒蕪地を開拓して溝を掘り畦をつくって小量ながら米や野菜の収穫もあり、家畜を飼ひ、桑や蜜柑を植えているかと思うと、そのかたわらにテニスコートを造ったりオルガンを買入れたりしている。十分に生活の基礎が出来ないうちにユートピアらしい構想が次々に現れ村の生活を苦しめるのである。この村の生活は大正九年に「土地」（『解放』四月号）を書いて、そもその土地購入のいきさつから村づくりの苦心が描かれている。そしてその末尾で「神よ、自分は心で神に礼拝した、自分の目は涙ぐんでゐた。清き流れはたえず流れ、仲間を受入れて海へと流れてゆく。幸よあれ！」と結んでいる。「新しき村」の発想、その思想の展開は「土地」の他に大正七年四月から五月にかけて書いた「新しき村に就ての対話、第一の対話から第三の対話」・「新しき村の小問答と現在の生活及びその他」（大八・四・一九）・「新しき村の説明」（甲乙の問答体）・「自分の人生観」（大九・三・一三）・「新しき村にて（対話）」（大九・八・二四）・「新しき村の信仰」（大九・九・二）・「新しき村と他の主義」（大九・九・三）・「新しき村の将来」（大九・九・四）・「新しき村についての対話」（大一一・六・四）・「理想社会」（大一二・七・一六）等に势力的に示されている。

明治初年には空想的科学小説や政治理想を描いた未来小説が多く輩出したが、時代の進展とともにより現実的な社会主義的傾向の小説が三十年代には現われている。然るに武者小路の「新しき村」構想は明治二十年代からの空想的社会改良思想と大きな相違はないと思われる。すなわち政治経済に基礎をおいた社会改良でなく人の善意とか倫理的に裏打ちされた努力によって明るい未来社会を建設しようというのである。例えば「新しき村に就ての対話」は第一から第三ま

であるがAという青年と先生との對話の形をとった独白で、青年Aは「先生は相変らず空想家ですね」と相槌を打ったり、聴き手代表として当然予想される疑問を出したりする者で殆んど先生の独白である、此処では前に述べた「クリンゲルの『貧窮』を見て」がその思想の根柢にあることが先ず挙げられる。すなわち「現世は汝の糧の爲には汝の一生を売るべしといひ兼ねない。現在さういふ境遇の人は幾らでもある。しかしそれは社会の制度がまだ成長し切つてゐないからだ。自分は労働をのろひはしない。しかし食うためにいやいしなければならぬ労働は呪ひたい。労働は人間が人間らしく生きるのに必要なものとしてなら讚美する。その労働は男は男らしく、女は女らしくする労働で、人間を人間らしくする労働でなければならぬ。(中略)労働は享樂ではない。しかし人間として誇りある務だ。」(下略)つまり労働は生きる爲に止むを得ずするものではなく、自ら進んでするものでなければ価値がないという考えである。

また労働の中には人の好まぬ労働もある、そういう労働はそれを望まない者にも時にはやつて貰わねばならないが、そのためにはそれだけの報いがあつていい筈だといひ「自分は血腥い革命なしに平和の裡に、人間の理性の力によつて、一歩づつさう云ふ世界に近づき得るものと思つてゐる。」と述べている。教育、恋愛、肉食問題(殺すなかれの立場から)などにも単純で明快な解答が用意されている。また犯罪者は罰せずその自覺に俟つ。たとえ一時は悪が榮えても遂には正義や善意が勝利することを信じたい。そういうことを小規模ながら実践するのが新しき村である。この先生の言葉に青年Aは「先生のお仕事のうまくゆくことを私も祈りませう。」で終っている。(これらの對話の魅力は「武者小路宗」の案外多かつたことを思わせる。)次で「新しき村と現在の生活及びその他」では可成り具体的に「村」の構想が述べられている。これは一種の共產村で「われわれは健康に必要な衣食住を得ることが第一要件だ。」といい衣食住に不自由しない、果物や菓子も一定量までは自由に得られるようにしたい。住についても各自が一室をもち、集会所、図書館、美術館を小さくともつこと。働く時間も今は天氣がよいと十一時間も労いているが、将来六時間乃至八時間にしたい。物質的に平等であるとともに精神的にも平等。お互いに尊敬し愛を払うべきものには払う、しかし強制

はしない。などが述べられている。次に「新しき村の説明」では村の会員（村人）を二種に分け、村の趣旨には賛成だが、色々な事情で村に入れない者は第二種会員となり、毎月一口（五拾錢）以上寄付したり、村人の為の便宜をはかりたりする、すなわち後援会のような組織も考えられた。

もしこの仕事が

名譽心からやつた仕事なら

悪口いはれたらつぶれるだらう。

金をたよりにしてこの仕事を始めたら

金がなくなつたらつぶれるだらう。

ある人をたよつてこの仕事を始めたのなら

ある人に背かれたらこの仕事はつぶれるだらう。

だが人類の真心の上にこの仕事は立つている。

人類に真心のある間、生長してゆく

この仕事は。

○

「一人で立つても一番強い道だ。

二人で立つても一番強い道だ。

百人千人立つても一番強い道だ。

いい道だらう。この道

人類の真心の上に立つ、この道」

これらの実践綱領ともいふべき言説を通じてわれわれが知ることは、先づ小さな理想の村を造つて他に及ぼし、やがて社会全体を理想化するという考えの矛盾である。第二にこの村の構想が結果的には反時代的行動であり、マートン・アベにおけるウィリアム・モリスの^{注二}前轍を踏むものであるということである。大正七年に入居した宮崎県児湯郡木城村字城の「新しき村」は苦難の開拓事業が継続され、大正九年には付近の川南町に「第二の新しき村」が造られ、営々苦心の成果は余りあがらなかった。この時代の「村」と武者小路との關係を辿ると

大十一 「現代三十三人集」刊行「新しき村」の資金とした。

大十五 「村」から出て奈良に移転（母と生活するため）

昭二 東京移転（小岩）『大調和』創刊

昭四 下落合移転。この頃しきりに「新しき村」と銘付った美術展や演劇公演を行う。

昭十三 宮崎県の「新しき村」の一部が水力発電所建設で水没するので代え地物色。

昭十四 埼玉県入間郡毛呂山町に「新しき村」建設。

以上の経過を見ても「新しき村」は少くとも武者小路の理想の一部をも実現していないことが解る。埼玉県での「新しき村」は養鶏業によつて経営的には一応安定したが、それは村人が生活に困らないというだけのことである。理想的な生活とは凡そ縁の遠いものである。彼はその後、絵に傾倒して、作家と画家を兼ね個人としては理想的な芸術生活をなし得たが「新しき村」に関しては客観的にはまったく失敗に帰した。このことは有島武郎なども早くからそれを予見していたし（「武者小路兄へ」中央公論大七・七）ほかの白樺同人にも成功をあやぶむ者が多かった。にも拘らず多くの人々が

これを後援したことも事実である。形の上では、事業としては明らかに失敗であるが、武者小路自身は少しも失敗を意識していない。村を出てからの彼は、なおも村のためにつくし「新しき村劇団発表会」や「新しき村美術展覧会」が東京で催され、常に関心が払われていた。だから現実的には失敗しても、その成否を超越して理想追求の精神が今も生きているということが出来る。そして大正七年以降の彼の著述が多かれ少なかれこの「新しき村」の理想に裏打ちされ、または其処から出発していることを忘れてはならない。大正八年から十年にかけて書かれた「幸福者」・「耶蘇」・「第三の隠者の運命」などはそれぞれに「新しき村」的発想の作品であるが、中に就いて「第三の隠者」は大正十年一月「出鱈目」という題で『白樺』に連載を始め十一年十月号で完結。十二年五月曠野社より単行出版されたもので「新しき村」の理想を描いてみせた空想小説で、アレゴリーの性質をも帯びているということが出来る。聖書を踏まえてキリストの事跡を追いながら理想の国「新しき村」の未来図を描いてみせたもので、従来の図式的な設計図でなく肉付けされた形でそれを示そうと意図したものである。そこにはいろいろな人間の類型があつて、それが複雑にからみあつて生活が営まれているが、その人物設定は戯作小説のそれと同じで稍勸善懲惡的な取扱いがなされている。

写実小説と異なりアレゴリーとしてはその方が自然な方法というべきである。もともとこの中では従来の對話篇などで示されなかった例えば金銭の問題などが具体的に示されている。この理想国では労働が金に換算されないから、旧い社会の觀念を持つ者には不満も出てくる。「たしかにここでは食うことに困る人間はゐない。貧富の差もない。過労に苦しむものもない。そのかはり、面白いことも楽しみもない。」といつていくら働いても金持にもなれないし、酒を飲んだり女を買ったりすることも出来ない、だから面白くないという男も出てくる。これには勿論明快な解答が与えられている訳ではない。ただ強制されない労働を楽しみ、生活の若労がなくて、真に愛し合う者だけが結ばれる。それではないかという消極的な考えが述べられ、異なる世界觀が人間を変えて行くところまでは触れていない。

注

- (一) 『智慧と運命』によるとメーテルリンクは「自己の如く隣人を愛するには自己愛とは何かを知らねばならない」と云っている。即ち他人の内の自己を愛することであると云う。
- (二) この場合ウィリアム・モリスとも異なる。モリスは労働と芸術を結びつけることによって労働を価値づけようとした。マートン・アベールの工房、ケルムスコット・プレス等すべてその目的で運営された。

「友情」論

ところで茲で「新しき村」の理念の問題をしばらくおいて「お目出度き人」の延長線上にある作品として「友情」について考えてみたい。このよく似た作が九年の歳月を距てて書かれたことは一考に価いすると思われる。前者の成立の事情については既に述べたが、後者は大正八年十月十六日から十二月十日まで大阪毎日新聞に連載されたものである。これも前者と同じく一種の失恋小説である。ただ茲では主人公野島とその愛人杉子との関係が、「お目出度き人」の如く淡々しいものではなく、ある程度の交遊関係が描かれている。全体は上下二篇に分れ、上篇では野島という作家志望の青年とその親友大宮——彼は既に新進作家として認められている——を取巻く友人、その一人仲田の妹杉子の美貌に野島はあこがれ、友人として交際しているうちに、自分の妻は彼女をおいてほかにいないと思ひ込む、そして一早く親友の大宮にそれを打明ける。上流社会の青年男女の交際としてピンポンの会を催したり、トランプに興じたり、夏になると鎌倉の別荘に出かけて水泳をともしたりという生活の中で各人各様の性格は可成り描かれている。野島や大宮のような良心的で非妥協的なインテリ型に対して、社交的で如才なく立回る早川という青年を配している点、「浮雲」における内海文三と本田昇の關係に似ている。ただここではインテリ型にも野島型と大宮型があつて、野島のように内攻的でお世辞一ついえず、生真面目であるだけで特に才能のひらめきもない青年は恐らく女性には親しみ難いタイプで

あろう。同じインテリ型でも大宮は進んで交際を求めたりはしないが、運動は万能でピンポンの会では多くの青年を敗かして女王のように振舞っている杉子を完膚なきまでに負かしてしまう。その思いやりのなさの中には、逆に野島への思いやり、友情がこめられているのである。そして大宮は自分が居ては野島と杉子の仲が進展しないと考え、外遊を思い立つ。その見送りの日、野島は杉子の大宮をみる眼から彼女の太宮への傾倒を知り愕然とする。その後結婚の申込みをしたが勿論拒否された。下篇は書簡体で、その前半はフランスにいる大宮と杉子との往復書簡で、杉子が熱烈な愛の告白を書き送り、野島のことを思つて曖昧な返事をしていた大宮も次第に自己に忠実であるためには杉子への愛を肯定的にみなければならぬと考えるようになり、二人の手紙は熱烈な愛の言葉の交換となる。

下篇の最後は「わが友よ」で始まる大宮の野島への手紙で、二人の交換した手紙を送つて二人が熱愛するに至る次第を述べ、たとえ野島の怒りを買つても自己に忠実であらねばならぬといひ送る。そしてこの手紙を読んで野島は「泣いた、感謝した、怒つた、わめいた」という状態で結局友の恋愛を認め自己の敗北を認めるよりなかつた。そして泣きながら「自分は淋しさをやつたとたへて来た。今後なほ耐へなければならぬのか、まづたく一人で。神よ助けたまへ」と日記に記した処で終っている。

先ず「お目出度き人」がまづ一人相撲の恋愛であるのに対して、ここでは無邪気に話しかけてくる杉子の一言一句に一喜一憂する野島の苦悩やあせりは可成り描き出されている。しかし前にも触れたように野島は負け大型で同じインテリでも大宮には太刀打ちは出来ない。始めから失恋は運命づけられている。この大宮はタイプとしては志賀直哉を思わせる、また野島は勿論武者自身に近い、しかしこの作は実話に基くものではなく全くのフィクションである。ただ大正八年という「新しき村」が緒についたばかりの時点である。何故九年前の失恋物を繰返して描いたのか、そこに疑問が生ずるのである。「お目出度き人」がトルストイからの脱出を記念して試みられたものであることは既に触れた通りである。そしてその問題は既に卒業して「新しき村」のような実践行動に入ったのである。ここでは既に性欲の問題

は卒業して、野島が性欲に苦しめられることとは全然触れていない。それよりも彼の生真面目な生活態度にも拘らず、彼の真価は理解されず、失恋の痛手を負うことは何を意味しているか、大宮を世間的な評価において優れた人物として描きつつ、負け犬の野島が運命に弄ばれつつも理想を貫き、よりよく生きようとする意欲を少しも失わず、自己を押しとおして行くところに作者の中心的な志向があるのではないかと思われる。「新しき村」には頭初より多くの批判があり、その成功を危ぶむ者も多かった。彼はこれらの批判には幾つかの感想や論文で答えたが、それは恐らく一般を納得させられるものではなかったに違いない。実生活で破れても自己を貫きとおす強靱さをここでは示そうと試みたもののように思われる。武者小路の全作品には戦後作品をも含めて、社会に背馳しつつ、しかも社会に即して行く行動や思想の矛盾がみられるのである。この作品はそういう矛盾に立っているとともに、その題が示しているように、野島の失恋にも拘らず大宮と野島の友情は少しも害されないことを述べるのが本旨である。敗れても敗れてもそれが逆に精神的向上への契機になる、二人の男の友情は一人の女を一人の男が奪うという形では微動だもしなかった。世俗的には全く相容れない仲であるべきが却って自然に即して女の選ぶにまかせて、旧の友人関係が復活するのである。これが常識的には些か作為を感じしめるが武者小路は本心から大真面目で信じ、これを書いているのである。水の流れるように自然に即して生きることは彼の生活哲学である。大正十二年関東大震災の後『白樺』が廃刊になった後をうけて『不二』が創刊され、次で昭和二年四月には『大調和』の創刊をみるが、この雑誌の題名にも彼の理想の一端が伺えるのである。いろいろな矛盾に満ちているのが人生である。その矛盾がやがて解決して一つの調和に到達する。これが天の意志でありそれ故に人生は楽しく生き甲斐があるのである。

ここで少し溯って武者小路の生活力が何処から来ているかについて付加えたい。メーテルリンクの影響については既に触れたが、その出発頭初の影響で忘れてはならないのはロダンである。明治四十三年十一月号の『白樺』は「ロダン号」と銘打ってロダンの七十回の生誕を記念する特集号とした。頁も常の二倍の二三六頁、同人がこぞってロダンの芸

術を論じ、人生觀を論じた中で武者小路は「ロダンと人生」という一文を載せている。表題はロダンと人生であるがここではロダンの人生觀を紹介しようというのではない。ロダンがいかに自分に影響を与えたかの感想である。彼がロダンの芸術を尊敬するのはその男らしい底力である。自ら人生を切り拓いて行こうとする行動力である。ロダンが最もよく自我を生かしたからである。そして自然の神秘、自然の真理に心から傾倒してその奥儀に参入しているからである。ここではロダンがその彫刻を通していかに呼びかけ、彼の心の中のある力を引出したかを語っている。そしてこの短文のあとがきとして次のように述べている。「自分は自分の心の内に生きてゐるロダンに就て書いた。ロダン自身やロダンの心の内に生きてゐるロダンや、其他の人の心の内に生きてゐるロダンとは異ふかも知れない。それはやむを得ないこととして許して戴きたい。」つまり、自己本位にロダンが自分の人生觀にどのような影響を及ぼしたかについて述べた訳である。真善美、宇宙の意志としてこの世に存在し、それに男らしく立ち向い、その奥儀に参入することが人生の目的であり、欲びであると覺つたのである。これはやはり「新しき村」の実践力の原動力となつてゐるように思われる。

「愛と死」論

武者小路の作品系列の中で「お目出度き人」と「友情」の線上にある作は昭和十四年七月号の『日本評論』に發表した「愛と死」である。この三作は制作の時がそれぞれ可成り距つてゐる。にも拘らずやはり同系列の作と見るべきである。この作は前二作に比してその技法上は非常に進歩してゐる。殊に女性の觀察が行き届いて、プロットにおいて、人物描写において間然する處がない。主人公に一人の友人がいて、そこに一人の美しい妹がいる。そして主人公がその妹に恋をするという單純極まるストーリーは従来の構想と余り變化はないが、今回はそれが極めて自然に夏子と村岡の愛が芽生える経緯を追つて描いてゐる。畳み込むように極めて僅かつ二人が近づき、少しづつ理解し合い、そうして完

く偶然に外遊することになり急速に二人の愛情が昂まりを示し、フランスと日本の間を愛の書簡が激しく往復するのは「友情」の場合と同様であるが、昭和十一年春から夏にかけて欧州旅行、主として美術行脚——の見聞を基にして、東西美術論やらヨーロッパ生活に対する感想批判も展開されている。二人の結婚生活の理想を語るとともに、横光利一が『旅愁』で展開したような日本的なものの探求、西洋を觀て東洋——日本の真価を発見するという考え方が展開されている。

この作品は先ず書き出しの秀拔さを挙げなければならない。主人公が野々村という年長の友と親しくなる理由——自分を認めてくれる人として、世間が評価しないのに自分のよさを認めるという形で二人の友情が深まり、「僕の妹は君のものを愛読してゐるよ。」という野々村の言葉からその妹夏子が自分に好意をもつことを知り、この好意はその後もいろいろな形で現われ、野々村の誕生祝いの席で友人達にかくし芸を強要されて困りはてている岡村に代つて夏子が逆立ちをしてみせたり、それから思いついてほかのパーティで夏子の逆立ちを折込んだ寸劇を觀ることになる。ある時は野々村の留守中に上り込んで夏子と話し二人の氣持が次第に近づいてくる。こうした愛の進行を描く中でも武者獨特の考え方が随處に出てくるのである。夏子に好意をもちだしてからも、その好意をその儘表現するよりは、自分が偉くなくて夏子に感心されたいという表現をしている。「若い時の自分は征服欲が何よりも強かつたといひたいくらいで何か不平があつたり、不快があつたりすると、自分の仕事でそれを征服したひと思つた。」この場合不平や不快ではなく、この負けぬ氣でよい仕事をして夏子に感心させようというのである。逆立ちを得意とする可憐な少女を愛する岡村はまた「あまり現実的な夫婦を見てゐると幻滅を感じる」といい、ただ平凡で平和な生活には飽きたりない考えの持ち主でもあつた。そしてクライマックスは夏子の死である。帰国の途中日本へ歸つてからの夏子との新婚生活を夢見ている処に流行性感冒で急死したとの電報を受取る。それからの岡村の苦しみは言語に絶するものがあつた。

この作では前二作に比して總ての点で、技巧、構成、人物描写において優れており作家生活二十年の年輪が感じられ

るのであるが、最終的に失恋——この度は恋人の急死という思いかけない出来事になっているが、この愛が完成されないで深い悲しみの淵に沈む点は同じである。彼女の死は岡村をして桜が一杯咲いている春の世界が、一変して嚴寒の世界になったと感ぜしめるが、人は死によつて永世に生きることに気がつき死神に復讐したような氣持になり「私はこの残酷極まる運命にどう復讐してやらうかと考へてゐる。殺された者が神になる。この位りつばな復讐はない。私にはそんなりつばな復讐は出来ませんが、参つて、参つて、参つてもはいずり上り夏子さんの愛に靈に報ひたい。」といつの間にか立ち直つて強く生きることが死んだ夏子に報ゆることだと人生肯定的な態度に變るのである。そして、靈的な世界に対する考えとしては、「死んだものは生きてゐる者にも大なる力を持ち得るものだが、生きてゐる者は死んだものに対してあまりに無力なのを残念に思ふ。」といい「死せるものは生ける者の助けを要するには、あまりに無心で、神のごときものでありすぎるといふ信念が、自分にとつてせめてもの慰めになるのである。」という悟りの境地に達してこの小説は終る。

さて問題はこの三作が技法上の相違、人物描写の巧拙などを別にすれば印で押したような同型の小説で失恋を前提として、いかにその傷手から立ち直るか、打ちのめされ打ちのめされても強い生命力は不死鳥のように力強く生き続けるのである。武者小路の真髓は実にここに在りといわねばならない。

二つの武者小路実篤論

さて武者小路実篤についての研究で注目すべきものは案外少いのであるが、本多秋五の『白樺』派の文学』（昭二九・七・三〇講談社刊）は特に武者小路についての項目を立てていないが随處にある武者観には首肯すべき説が多い。以下同書より孫引きしながら本多の武者観をみて行きたいと思う。同書は大正五年九月号の『新社会』に掲載された山川菊栄の「流行文芸に心酔する現在青年の心理」という論文を引用して、その型を五つのパターンに分け

一、ベルグソン生翳りの「創造屋」

二、年中「俺」づくしの独り言をいつて感激する「自己耽溺自己崇拜家」

三、安価な人道主義の水同様の手製の酒に陶然としてゐるセンチメンタルなトルストイヤン

四、働き盛りの若い身で居ながら……何事にも身を入れず、何事も馬鹿々々しい様に云ふ……デカダンのノラクラ者の「幻滅屋」

五、個人と社会を別々に考へて……「個人主義」の看板をかけて、あやしげな草の庵に昼寝してゐる世捨人の若隠居非常に手厳しい青年批判ではある。白樺派の人々がいづれに属しているか興味ある問題である。本多の挙げるのは「自己の優越を無条件に前提とした天降りの指導者意識」である。そこから出発して自己を生かす手段として芸術家の生活を選び、より高い芸術を生むために生活をより高めようと努力する、生活すなわち芸術の理想を実現しようとする。それは武者小路の個人的な特性で教祖的な説得力をもった性格と考えられる。次に挙げられるのは武者小路の思想における社会性の欠除である。ほかの『白樺』同人達と同じく（尤も有島武郎は例外）彼は当時の多くの社会問題には馬耳東風であつて、雑誌『白樺』などもその点、美術雑誌と同様であるといつてゐる。このことは既に述べた「新しき村」の反社会性と一致する言説である。本多によると武者小路の社会的無関心は「隣人の痛苦に対する無感覚からの無関心ではなく、それを痛感しすぎる人間の自己救済のための無関心」「傍点筆者」すなはち、『仁にすぎれば弱くなる』というセンチメンタリズムの自己克服のための無関心、といふ性質をもつてゐたものである。」といつてゐる。そして武者の人生肯定の一面を歌を引用して説明してゐる。すなわち「明日ありと思ふ心のあだ桜、夜半に嵐の吹かぬものは」を武者は「吹かぬことあり」だといつてゐるという。「人間には悪人がある。それは少しも珍らしくない。さう思つて實際世間を見る、存外善人がある、人間には善人もあるよ。この発見は自分達を涙ぐまず。」この善意と楽天観が彼の真髓とみるのである。そのほか武者小路の徹底した反戦思想を挙げている。（しかしこれは第二次世界大戦で崩れ

た)武者小路の思想が一部の狂信的崇拜者を除いて次第に一般読者から置き去りにされ始めたのは大正末期——決定的には昭和初年である。

左右の思想の渦巻く昭和初年の日本社会は、もはや善意の文学とか人道主義の文学を問題にしなくなった。しかし彼が創作活動において真に空白期となつたのは昭和十年以後の大東亜戦争の発展した時期である。昭和十一年には四月に渡欧に出発、各地の美術館を巡遊して帰国後はその見聞記を書き、戦争の苛烈になつた十六年には『詩集』を出し、十三年には『人生論』を発表しているが、創作では『婦人公論』に連載した『幸福な家族』(昭一五・一〇)のほかには見るべき作はない。むしろ戦争協力者として昭和十七年十一月大東亜文学者会議で講演したり、翌十八年には南京で開催された中日文化協会の大会に日本代表として出席したり、政治的な活動が目立つのである。曾ての反戦論者が八絃一字の欺瞞的政策に踊らされたことは高村光太郎とともに惜むべきである。彼は敗戦後、公職追放令G項該当者として追放されたが昭和二十四年「真理先生」によつて復活しその後は老年にも拘らず活発な創作活動を展開している。

武者小路実篤を論じたものでもう一つ首肯すべきものは亀井勝一郎のそれである。亀井が先ず挙げるのは「詩」である。詩集としては昭和十六年甲鳥書林から出版した『無車詩集』があるが、詩作歴はかなり古く文学活動の初期から盛んに詩作している。これにつき亀井は武者の言葉として次のような引用を試みている。「詩にもいろいろの種類があると思ふ。僕の詩はどういふ詩か知らないし、人によつては詩とは云へないと言ふかも知れない。自由詩と言うべきものか。僕は詩のことを特別に研究したものでない。ただ何かかいてゐる内に、だんだん調子が高くなり、羽の生えた言葉が生れる。その時おのづと詩が生れるのだと自分は思つてゐる。……散文は足で地面の上を歩くやうなものだ。(下略)亀井は彼の詩に対して思想詩人だから箴言風の作があるのは興味深いといつてゐる。誰でも日常使つてゐる平凡で殆んど気にもとめない生まの言葉を組み合せて、しかもそれを見事な詩語たらしめ新鮮な味を出しているという。

次に絵画論が挙げられる。ヨーロッパ旅行から帰つて書いた「マチス・ルオー・ドラン・ピカソ訪問記」である。つ

まりこれは単なる近代絵画の鑑賞ではなく、その絵画から何ものかを擷み取ることである。その文学を豊かにするのではなく人間形成にも役立てているというのである。そしてこの旅行が、作家としての彼に大きな転機をもたらしたと見るのである。

「真理先生」論

戦後の創作活動は山谷五兵衛の物語として進められた。昭和二十一年七月に戦時中の日本文学報国会関係の活動により「公職追放令G項」該当者として追放され勅選議員をも辞し、執筆活動も控え目であったが、二十三年七月に「彼の羨望」を『小説新潮』に発表したのを皮切りに昭和二十四年一月より二十五年十二月までに大作「真理先生」を『心』に連載、昭和二十八年一月には『馬鹿一』を河出書房より出版。二十九年一月より三十一年三月にかけて「山谷五兵衛」を『心』に連載。三十二年三月より三十四年三月にかけて「白雲先生」を『心』に連載。三十四年九月より三十五年四月にかけて「馬鹿一の死」を『心』に連載。三十九年十一月短篇「山谷五兵衛完敗」を以て一応このシリーズにピリオドを打つこととなった。これらの作品群は山谷五兵衛を中心として真理先生、馬鹿一、泰山、白雲子などの現世を超脱した老人の交遊を描いたもので、ジュネレーシエンの異なる稲田、愛子、杉子などを配して物語が進められている。戦後の十七年間この群像を描き続けた訳である。

今第一の長篇「真理先生」を取挙げて論ずることとする。さきに『お目出度き人』を論じた時その作の特徴として、単純なストーリー、単純な文章、主観的表現ということを取挙げたが、それから実に四十年の歳月を経て書かれた『真理先生』（六十四才の作）においても全く同様の特徴を挙げることが出来るのである。すなわち単純なストーリー、単純な文章、主観的な表現が、四十年後のこの作を特徴づけているのである。勿論その間に文章作法や創作技法の上に進歩がなかった訳ではないが、しかも尚単純で主観的であることに変わりはない。主人公は僕と称して一人称で登場する山

谷五兵衛で、これは作者の分身として作中人物の行動や思想を批判し解説し、時には狂言廻しの役も務めるのである。しかしテーマを忠実に追って行くと実際の主人公は馬鹿一であり、真理先生である。しかしこの作は飽くまで群像として人物が描かれていて、戦後の烈しく移り変る世相とは全く交渉に、つまり一九四〇年代としての要素、社会的要因は何も認められない。その意味では超現代的な大人のメルヒェンであると思われることも出来る。ある人がこの登場人物を竹林の七賢に擬したが洵に当をえた見方であるといえよう。つまりこの作は一九二〇年代でもまた一九七〇年代でも同じことである。完く社会的現実を無視して老芸術家達の芸術に精進するひたむきな求道精神と善意に充ちた人間関係が描かれている。そして至る処に作者の思想——人生観がちりばめてあるのである。例えば、真理先生の言として「僕が耶蘇や釈迦を限りなく愛するのも、手が少しも赤くならないからです。孔子の手には一滴位赤い血がついている。私は孔子は自己完成については人類第一の先生と思って実に尊敬していますが、その点で耶蘇や釈迦の方になお神聖さを感じます。」といって青年時代からの平和主義の立場を貫いている。

彼が戦時中、戦争協力者であったことは明らかに矛盾するが、これは「新しき村」の生活を失敗と認めないのと同様に彼においては少しも矛盾せずに成立するのである。彼は人生の不如意、人間の善意に関係なく訪れる不幸として恋愛の破綻をあげる。「お目出度き人」以来常に繰返して失恋を取扱い、それを乗り越えることによって人間的に成長する姿を描いてきたが「真理先生」においても、それが従来のテーマのヴァリエーションとして、馬鹿一のモデル問題に取上げられている。愛子ここでは永遠の女性であり、杉子は現実に生きている美しい存在として、手のとどく美として取上げられている。しかし共に馬鹿一にとっては、描くべき対象であつて、実生活に関り合う相手ではない。ところでここに登場する山谷五兵衛を始めとして真理先生、馬鹿一、泰山、白雲子いづれも類似の性格で、取り立てていふべき個性はない。皆共通点を持ち、その志向する処なり行動は同一軌跡とみることが出来る。これは武者小路好みの幾つかの類型的人物を登場させてほとんど同様の言説を吐かせ楽しんでるように思われる。メルヒェンという意味はそこ

いらにもある。一体武者小路の小説は日常生活の具体的な描写はほとんどない。具体的な日常性を捨象して、自己の好みによる一側面のみを描く型破りの小説である。従つて個性というものはない。また風景とかそのほかの背景もほとんど描かれない。その点彼の作品はいかなる長篇でも常にデッサンに終っている。しかもデッサンでありながら彼が馬鹿一に現しているように一線一劃もおろそかにしない執拗さがある。そして自己の好みによるある点が繰返し強調される。それは人生とは何ぞやという生への問いであつたり、人間の善意に感動することであつたり、少くとも複雑な現代社会では実現しそうな夢のような理想社会である。彼はそれを実現可能なものと信じて疑わない。彼にとつてその描く世界はその儘現実に連なるのである。「新しき村」の挫折を挫折と感ぜず、戦時中の戦争協力にも戦後に反省がないのは一貫してこの精神に貫かれているからである。所謂楽天主義とも違う彼独得の思想である。このように世間を無視して自己の信念に従つて常に行動する彼は実際には極めて常識的である。戦後昭和二十六年には一早く文化勲章を授与され、三鷹市名誉市民に推され、二十七年にはさきに追放とともに辞退した芸術院会員に再選され、二十九年古稀祝賀会が東京会館で盛大に催され、三十六年喜寿祝賀会を椿山荘に開催、四十年満八十才祝賀会が上野精養軒にて開催、来会者五百名余——と常に人々に祝福され敬愛されてその中であつた。偉大なる常識家といふべきか。

注

(一) 尤も彼は協力したと云つても自らは是と信じたから協力したので所謂国策に沿うべく努力したのではない。昭和十八年日中文化協会の招きで南京で講演した時も、時局問題には全然ふれず「梁楷の無心」について話したのみであつた。